

第2学年 総合的な学習の時間 学習指導案

草津市立松原中学校 教諭 山中 貴司

1. 単元名 「つながる『学びのファーム』を創ろう」

2. 単元の目標

- ・地域の環境を生かした作物栽培について理解し、収穫物の活用を通じて「松原ファーム」、「松原中学校」の魅力を発信できる。 (知識・技能)
- ・テーマをもって収穫物の活用の方策を練り、実践につなげることができる。
- ・ファームを今後も継続していくことの意義を考え、引き継いでいく方法を考える。 (思考・判断・表現)
- ・地域との協働で成り立っていることを意識して郷土への親しみを深めたり、仲間と協力して意欲的に活動したりすることができる。 (主体的に学習に取り組む態度)

3. 単元について

(1) 教材観

本単元で学習の場となる「松原ファーム」は、3年前に校地内に開墾された。ファームの理念は、地域と「つながる」、実生活と「つながる」そして、これからの学びに「つながる」価値を見出すことにある。単元テーマは、農業体験を通じた「他者との協働」、「郷土愛の醸成」、「社会性や経済観念の伸長」である。

1学期に実施した学級企画による作物栽培の経験を発展させ、第二弾となる学年企画の本単元のファーム活動に具体性をもって参画することで、より高い意欲で取り組むことができるものとする。また、地域の方の尽力により畑の土壌等の環境整備がなされていることを知ったり、畝やハウスづくり、収穫等の実作業に全員が携わったりすることで、他者とのコミュニケーションを深めながら協力して活動する意義を感じられる取組である。特に収穫作業では、郷土の自然の恵みを享受する喜びを高める機会になると推察する。さらに、収穫物の活用に関して、生徒自身が掲げたテーマのもとに意思決定や運用することで社会の一員としての意識向上に寄与するものと思われる。

(2) 生徒観

本校区は地域との結びつきも強く、人懐こい生徒が多い。そのため、言われたことや関心のあることには素直に力を注ぐことができる。その反面、自分の考えを率先して言動に移すことに抵抗が大きかったり、周りの評価を気にしすぎたりする傾向がある。

1年時では、「食品ロス」の学習や給食センターの見学等を通して身近な現状を知り、課題解決の一助となる「地産地消」に着目して、地場野菜を取り入れた献立を考えるなどしたことで大勢の生徒が日常的な課題として受け止めることができた。

2年1学期には、校地内の畑「松原ファーム学級企画」として夏野菜の栽培に取り組んだ。その後に行ったアンケートでは、近畿最大級のビニールハウス群を有する地元や家庭菜園の活動をより身近なものとして感じるような郷土・家庭と結び付けた意見が多

くみられた。一方で、課題として、生徒自身の栽培活動の計画性の乏しさや、作物の世話が不十分であったこと等が挙がっており、それらを生かして今回の作物である「松原ダイコン」の栽培に力を注ごうという意欲をもっている。

(3) 指導観

本単元の指導にあたり、まず昨年度までの松原ファームと収穫物の活用について確認をして、先輩が行ってきた活動を知る。そのうえで松原ファームの理念を踏まえながら、各学級で異なる視点から活用の在り方について検討を進めていく。それに際して活用案を詳細にしていくことで、先の行動計画の明確化につなげていく。

また、活用案の検討と併行して、専門家や地域の方の助力を得ながら土壌整備や間引き・追肥、ハウス作り等の実作業に勤しむことで、地域への感謝を抱くとともに、下準備の重要性と大変さを体感して食材が食卓に並ぶまでの工程を考える契機とする。

何より、活動全般を通して、教師は本校の今年度のESD目標として掲げている「アントレプレナーシップの醸成」を重視し、行動計画においては生徒の思い、発想を大切にして取組を展開していくよう努める。生徒発の「問い」を突き詰めて、自分たちでの意思決定から計画、行動へと移行していくように促す。

これら一連の活動から、生徒の周りとは協働して課題に立ち向かう姿勢、地域の一員としての自覚そして、実社会や多様な教科との学びにつながることに気づける素養を育んでいくことを念頭に置いて授業を進めていく。

(4) ESDとの関連

・本学習で働かせるESDの視点（見方・考え方）

相互性：自分たちが栽培しているような農産物が、日々の食卓や経済活動を支えており、社会生活を営んでいくうえで不可欠な要素であること

有限性：食品ロスや地産地消の学習をしてきたことを踏まえて、収穫物をあますところなく活用していくための視点をもつこと

連携性：周りからの支援や仲間との協力があるからこそ、よりよい成果が得られること。また、地元への愛着が豊かな地域社会の環境整備に役立つこと

・本学習で育てたいESDの資質・能力

多面的・総合的に考える力

収穫物「松原ダイコン」の活用案について、どのように付加価値を持たせるかファーム活動継続のポイントなどを、複数の視点から検討して立案する

コミュニケーションを行う力

作物の栽培、収穫物活用案の意思決定から企画、運営まで生徒が仲間と協力して主体的に活動する

つながりを尊重する態度

土壌整備や畝づくり等の作物を育てるに至る下準備に、多くの地域の方の助力があることを知り、郷土への理解と愛着を深める

・本学習で変容を促すE S Dの価値観

自然環境、生態系の保全を重視する

自然堆肥や水草堆肥の活用による琵琶湖環境の改善に対する理解促進

人権・文化を尊重する

地域環境や産業、地場ブランド野菜等の継承に関わる意識向上

幸福感に敏感になる、幸福感を重視する

仲間や異世代との協働、収穫体験や活用を通じて将来的な可能性を広げる

・達成が期待されるSDG s

1 1 住み続けられるまちづくりを

1 2 つくる責任つかう責任

4. 単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
①地域を考える学習が、今後の自分の生き方に深く関わっていることを理解している。 ②調査活動を目的や対象に応じて適切に行い、必要な情報を記録している。 ③地域参画に対する自己の認識の高まりは、探究的に学習してきたことの成果であることに気づいている。	①地域に目を向け、現状から課題を設定し、解決方法を考え、見通しをもって計画を立てている。 ②目的に応じて収集した情報を整理し、多角的に考察して根拠を示している。 ③自分の意見を明確にして、目的に応じてまとめ、論理的に伝えたり、発信したりしている。	①課題解決に向けて見通しをもって粘り強く取り組み、探究的に学習を進めようとしている。 ②農業体験と自分との関わりに関心を持ち、今後の生活や自己の生き方に生かそうとしている。 ③他者の発表から、異なる意見や考えを受け入れて尊重しようとするとともに、自分の特徴や良さを理解しようとしている。

5. 単元の指導計画（全10時間）

次	主な学習活動	学習への支援	評価（△） 備考（・）
1	○本単元のねらいと活動の流れを理解する ・ファーム活動の理念や過去の取組から収穫物の活用の在り方について案を出す	・収穫物の活用を考える際、過去の写真の提示や、今年度の活動を振り返り、イメージを持たせる	イ① (思判表)
2	○収穫物の活用案について、設定テーマから各学級で考えを深める ・目的や細部について検討する	・思考ツールを用いて具体策を考えるよう促す ・テーマに沿った活用案になるよう課題を共有できるようにする	・ロイロイ③ (思判表) ウ① (主体的)

3	○草津市の農業の現状と課題等を調べる ・班単位でパワーポイントにまとめる	・市の現状や課題を調べ、活用案とどのように結び付けていくかを考えさせる	ア② (知・技)
4	○各学級でプレゼンの準備を行う ・前時を踏まえ活用案の現実性を検討する	・軸となる活用案をもとに、課題等を照らし合わせながら精査していくように促す	イ② (思判表) ウ③ (主体的)
5	○学級代表によるプレゼンを行い、学年で活用方法を決める ・提案から、生徒自身が活用案を決める	・質疑応答を設けるなどして考えを深め、生徒の意思決定を1つに絞ることにこだわらず、よりよいものが選択できるような雰囲気づくりに努める	ア① (知・技) イ③ (思判表)
6	○畝づくり、マルチ・防草シート敷き等の実作業を、専門家の指導のもと実施する ・全員が交代で実作業に携わる	・入れ替わりの作業になるので、円滑に作業が進むように声掛けしながら、教師もともに活動する	ア① (知・技) ウ② (主体的)
7	○収穫物の活用について、具体的な方策と計画を練る ・誰が、いつ、何を、どうするか等の具体案を作成する	・決定した活用案に応じて、話し合いで分担を決めることを確認する ・それぞれの係が作業を進めるなかで、ゴールに向けて調整しながら取り組むことの重要性に触れておく	イ① (思判表)
8	○活用の実践準備に取り組む ・活用の本番に向けて、必要な準備を行う	・活用の準備を整えるために必要なことを出し合い、本番に向けて、他係とコミュニケーションを取りながら進めていくように進捗を見守る	ア① (知・技) ウ③ (主体的)
9	○「松原ファーム」の活動を通じた学びの意義について自分の考えを深める ・これまでの自身の取組を振り返り、気づきを言語化する	・振り返りにあたって、単なる「できたこと」にとどまらず、それまでの取組をどう生かしていきたいのかを考えるよう促す	ア③ (知・技) ウ② (主体的)
10	○「松原ファーム」を継続していくために必要なことを仲間と検討し、引き継ぐ ・前時と併せて、次年度への提案を行う	・活動の継続が、どんな価値を生み出すと思うか、を投げかける ・一意見が、学校や後輩への重要な提案になることを示す	ア③ (知・技) イ③ (思判表)

※ただし、保育実習で3年生が地域の園児とともに種蒔きを、1年生は土壌環境による作物の生育状況の比較学習を、本ファーム活動とコラボ実施。
また、それ以外の実作業（作物栽培や活用実践の一部など）については、課外で有志によるボランティア作業として展開する